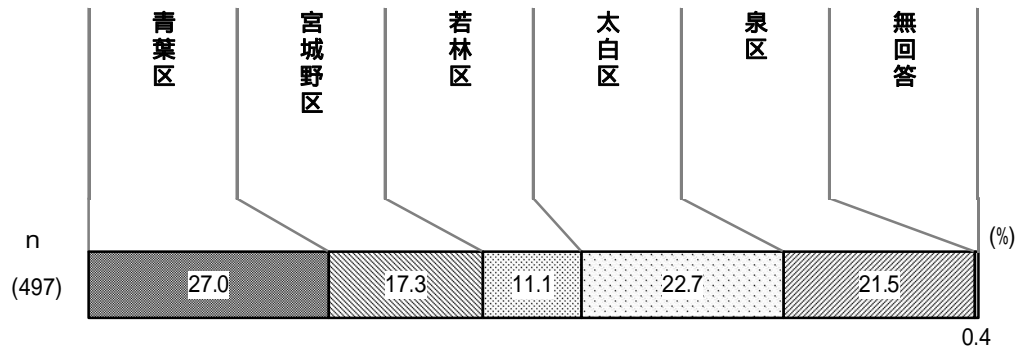


アンケート調査  
(市民)

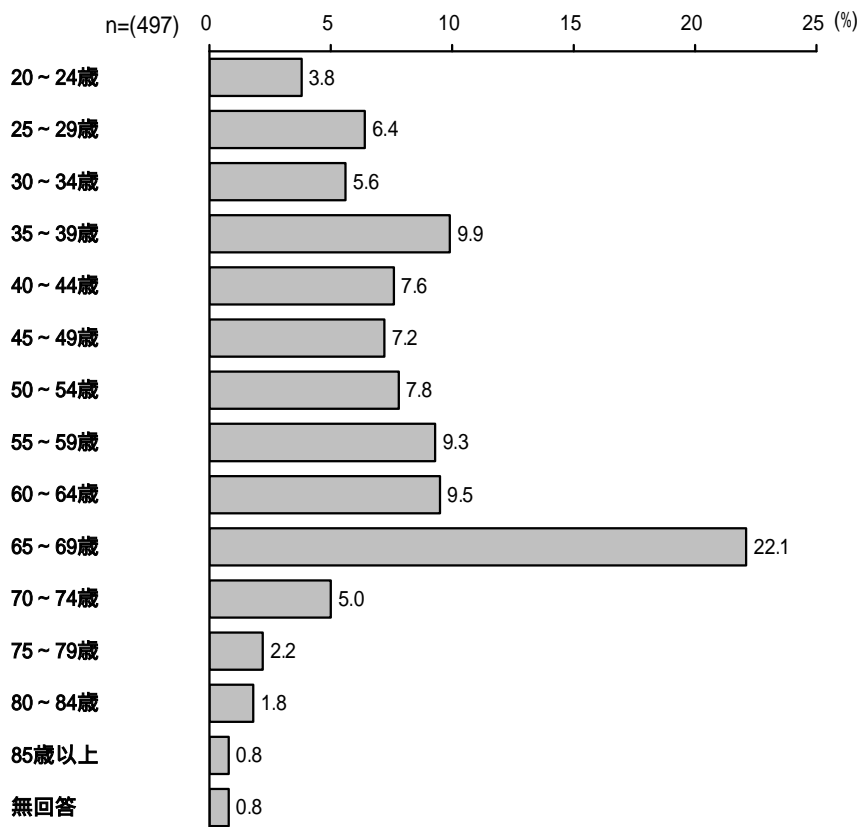
## 1 基本的な属性について

問1 あなたのお住まいの区はどこですか。( S A )



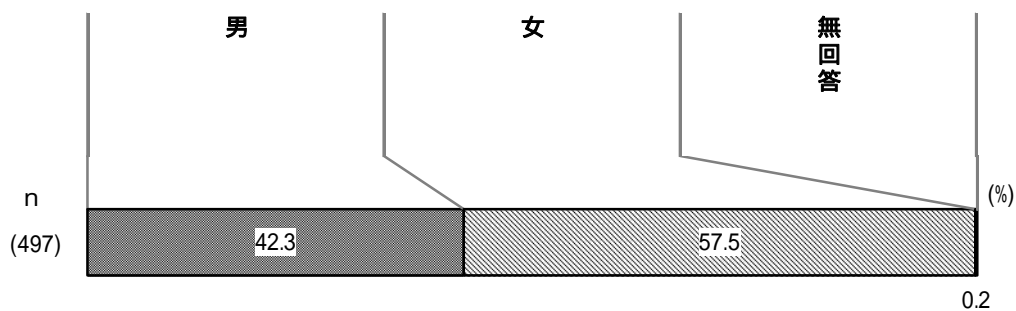
居住区については、「青葉区」(27.0%)が最も多く、以下「太白区」(22.7%)、「泉区」(21.5%)、「宮城野区」(17.1%)、「若林区」(11.1%)となっている。

問2 あなたの年齢は何歳ですか。(数値)



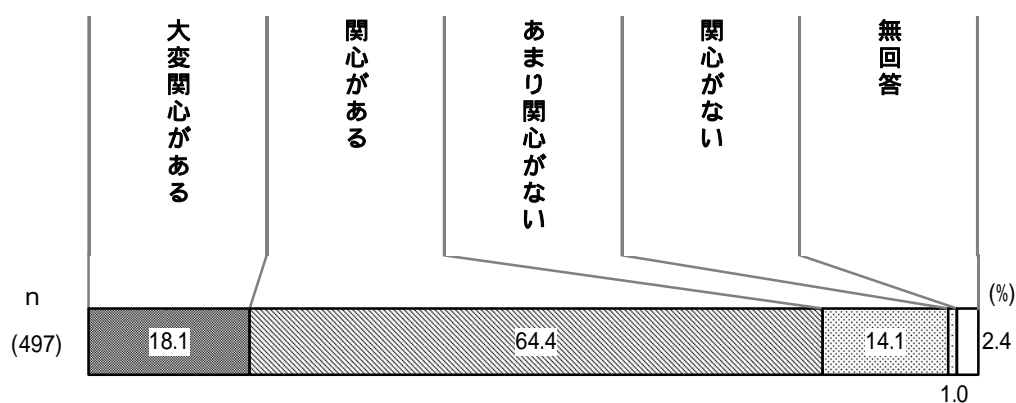
年齢については、「65～69歳」(22.1%)が最も多く、以下「35～39歳」(9.9%)、「60～64歳」(9.5%)、「55～59歳」(9.3%)となっている。

問3 あなたの性別は男、女のどちらですか。(SA)



性別については、「男」が42.3%、「女」が57.5%、となっている。

問4 あなたは「福祉」に関心がありますか。(SA)



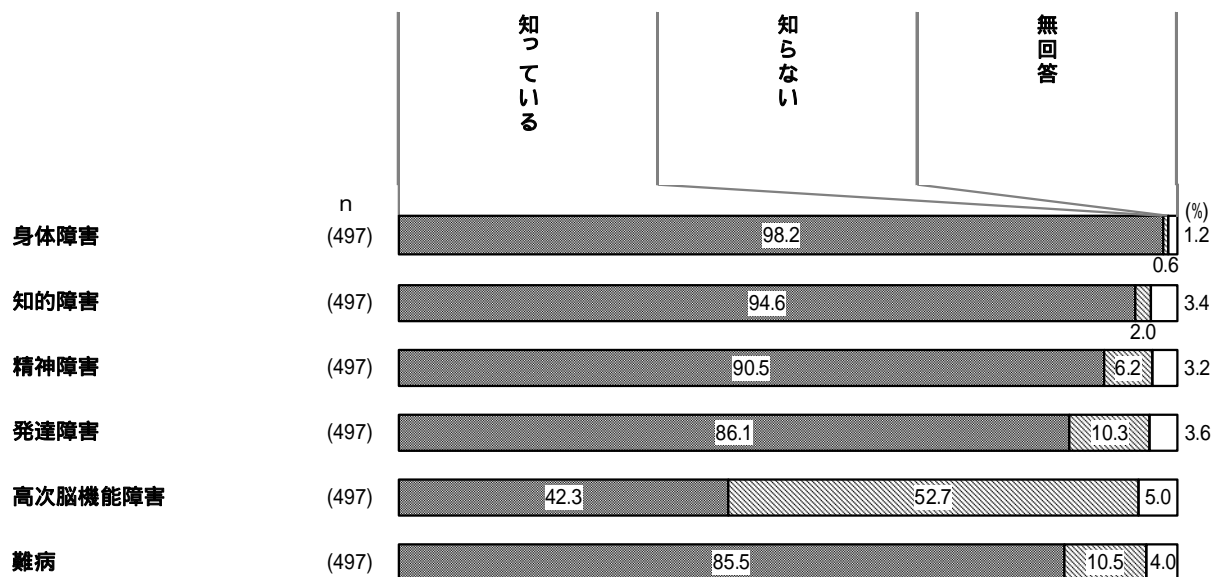
福祉への関心については、「関心がある」(64.4%)が最も多く、以下「大変関心がある」(18.1%)、「あまり関心がない」(14.1%)、「関心がない」(1.0%)となっている。

【年齢別】

	調査数 (n)	大変関心がある	関心がある	あまり関心がない	関心がない	無回答
上段：件数 下段：%						
全体	497 100.0	90 18.1	320 64.4	70 14.1	5 1.0	12 2.4
20～30歳代	128 100.0	7 5.5	80 62.5	34 26.6	4 3.1	3 2.3
40～50歳代	159 100.0	30 18.9	109 68.6	17 10.7	0 0.0	3 1.9
60歳以上	206 100.0	53 25.7	128 62.1	19 9.2	1 0.5	5 2.4

年齢別にみると、年齢が高くなるにしたがって「大変関心がある」が多く、年齢が低くなるにしたがって「あまり関心がない」が多くなっている。

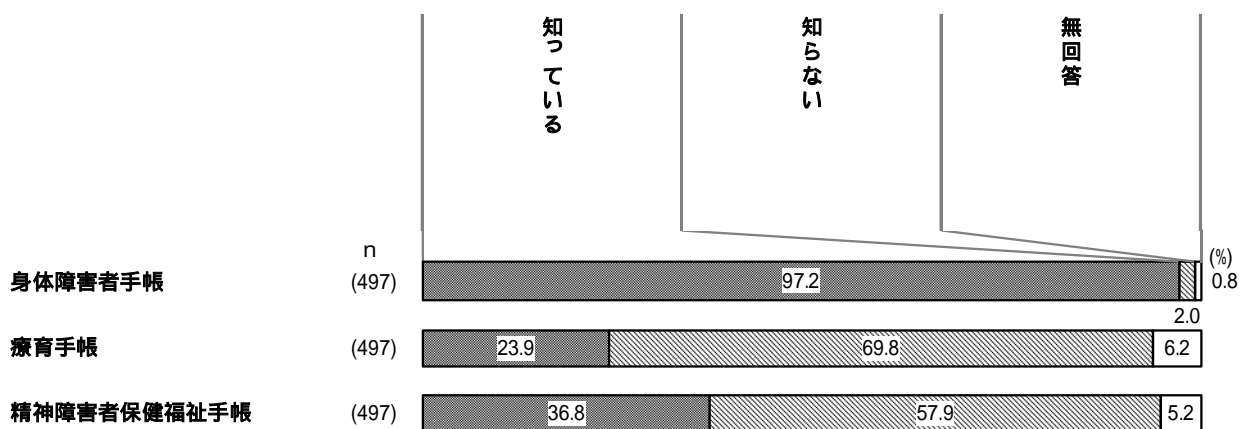
問5 障害には、以下のような区別があることを知っていましたか。( S A )



障害の種類認知については、「知っている」が多いのは、「身体障害」(98.2%)、「知的障害」(94.6%)、「精神障害」(90.5%)となっている。

一方、「高次脳機能障害」は「知らない」が52.7%となっている。

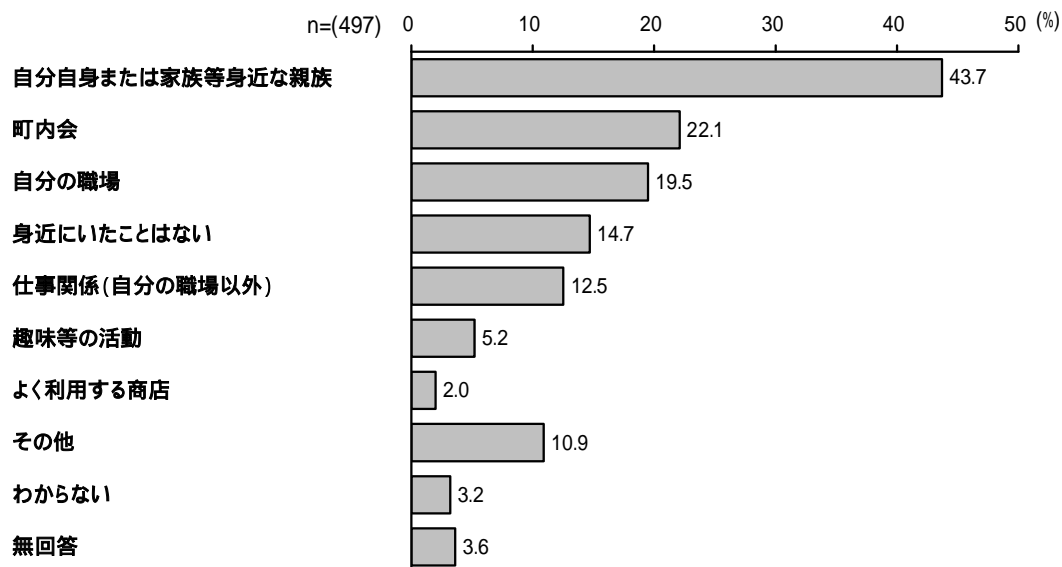
問6 以下の3種類の障害者手帳があることを知っていましたか。( S A )



障害者手帳の認知については、「身体障害者手帳」は「知っている」が97.2%となっている。

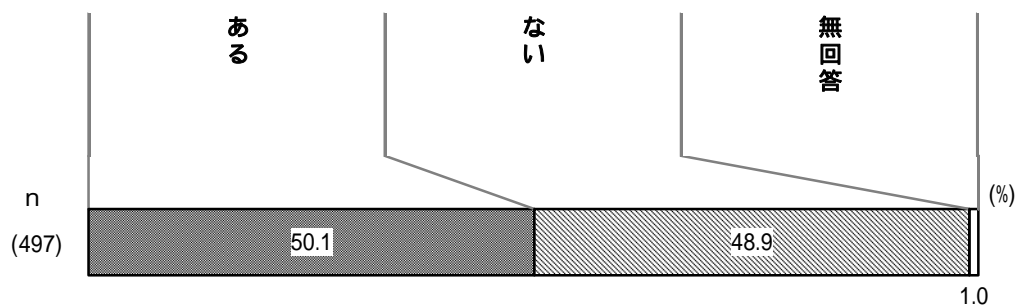
一方、「知らない」は、「療育手帳」が69.8%、「精神障害者保健福祉手帳」が57.9%となっている。

問7 あなたの身近に障害のある人がいますか(いましたか)、また、それはどのような場面ですか(でしたか) (MA)



身近に障害がいるかについては、「自分自身または家族等身近な親族」(43.7%)が最も多く、以下「町内会」(22.1%)、「自分の職場」(19.5%)となっている。

問8 あなたは、障害のある方の相談相手になったり、手助けをした経験がありますか。(SA)



障害者の相談相手や手助けしたことの有無については、「ある」が50.1%、「ない」が48.9%となっている。

【年齢別】

上段：件数 下段：%	調査数 (n)	ある	ない	無回答
全体	497 100.0	249 50.1	243 48.9	5 1.0
20～30歳代	128 100.0	68 53.1	60 46.9	0 0.0
40～50歳代	159 100.0	88 55.3	70 44.0	1 0.6
60歳以上	206 100.0	91 44.2	113 54.9	2 1.0

年齢別にみると、40～50歳代では「ある」が多く、60歳以上では「ない」が多くなっている。

【性別】

上段：件数 下段：%	調査数 (n)	ある	ない	無回答
全体	497 100.0	249 50.1	243 48.9	5 1.0
男	210 100.0	97 46.2	110 52.4	3 1.4
女	286 100.0	152 53.1	133 46.5	1 0.3

性別にみると、男性より女性の方が「ある」が多くなっている。

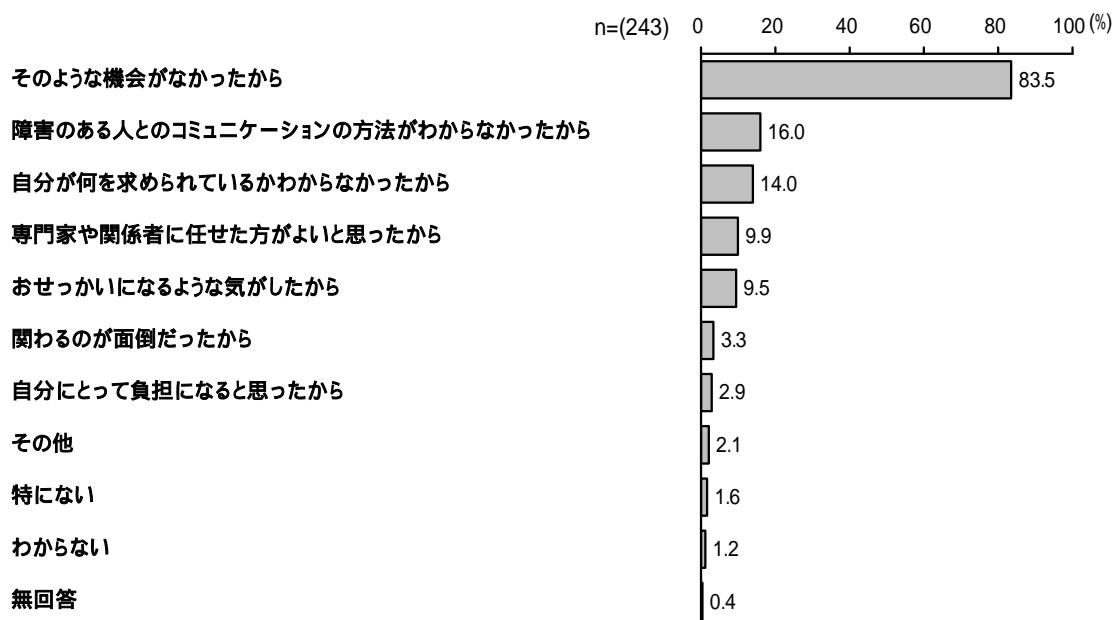
【福祉への関心別】

上段：件数 下段：%	調査数 (n)	ある	ない	無回答
全体	497 100.0	249 50.1	243 48.9	5 1.0
大変関心がある	90 100.0	60 66.7	30 33.3	0 0.0
関心がある	320 100.0	163 50.9	153 47.8	4 1.3
あまり関心がない	70 100.0	19 27.1	51 72.9	0 0.0
関心がない	5 100.0	2 40.0	3 60.0	0 0.0

福祉への関心別にみると、福祉への関心が高くなるにしたがって「ある」が多くなっている。

問9 問8において「2 ない」を選択した方におたずねします。

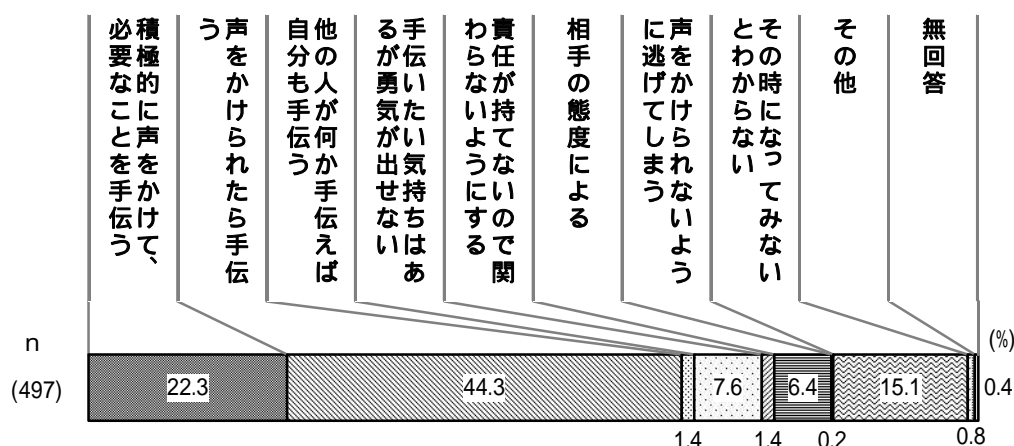
そのようなことがないのはなぜですか。(MA)



障害者の相談相手や手助けしたことがない理由については、「そのような機会がなかったから」が83.5%を占めている。



問10 街の中で何か困っている障害のある方に出会ったときどうしますか。(SA)



街中で困っている障害者に出会ったときの対処については、「声をかけられたら手伝う」(44.3%)が最も多く、以下「積極的に声をかけて、必要なことを手伝う」(22.3%)、「その時になってみないとわからない」(15.1%)となっている。

【年齢別】

	調査数 (n)	積極的に声をかけて、必要なことを手伝う、必	声をかけられたら手伝う	他の人が何か手伝えれば	手伝いたい気持ちはあるが勇気が出せない	責任が持てないので関わ	相手の態度による	逃げてしまう	声をかけられないように	その時になってみないとわからない	その他	無回答
上段：件数 下段：%												
全体	497 100.0	111 22.3	220 44.3	7 1.4	38 7.6	7 1.4	32 6.4	1 0.2	75 15.1	4 0.8	2 0.4	
20～30歳代	128 100.0	21 16.4	59 46.1	2 1.6	20 15.6	3 2.3	6 4.7	1 0.8	15 11.7	1 0.8	0 0.0	
40～50歳代	159 100.0	29 18.2	80 50.3	2 1.3	8 5.0	0 0.0	14 8.8	0 0.0	24 15.1	1 0.6	1 0.6	
60歳以上	206 100.0	61 29.6	79 38.3	3 1.5	10 4.9	4 1.9	12 5.8	0 0.0	35 17.0	2 1.0	0 0.0	

年齢別にみると、年齢が高くなるにしたがって「積極的に声をかけて、必要なことを手伝う」が多くなっているが、「その時になってみないとわからない」も多くなっている。20～30歳代では「手伝いたい気持ちはあるが勇気が出せない」が多くなっている。

【性別】

	調査数 (n)	積極的に声をかけて、必要なことを手伝える、必	声をかけられたら手伝える	他の人が何か手伝えれば自分も手伝える	手伝えたい気持ちはある	責任が持てないので関わらないようにする	相手の態度による	声をかけられないように逃げようとする	その時になってみないとわからない	その他	無回答
上段：件数 下段：%											
全体	497 100.0	111 22.3	220 44.3	7 1.4	38 7.6	7 1.4	32 6.4	1 0.2	75 15.1	4 0.8	2 0.4
男	210 100.0	38 18.1	95 45.2	1 0.5	16 7.6	3 1.4	14 6.7	1 0.5	41 19.5	0 0.0	1 0.5
女	286 100.0	73 25.5	125 43.7	6 2.1	22 7.7	4 1.4	18 6.3	0 0.0	34 11.9	4 1.4	0 0.0

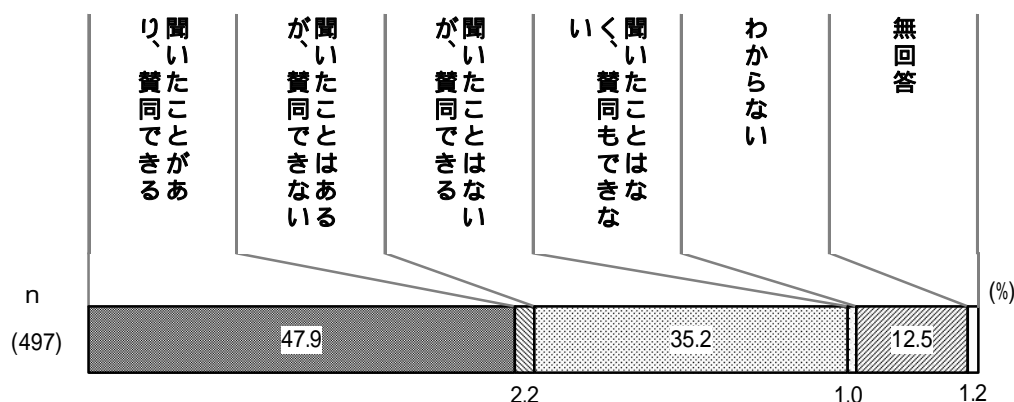
性別にみると、女性では「積極的に声をかけて、必要なことを手伝える」が男性では「その時になってみないとわからない」が多くなっている。

【福祉への関心別】

	調査数 (n)	積極的に声をかけて、必要なことを手伝える、必	声をかけられたら手伝える	他の人が何か手伝えれば自分も手伝える	手伝えたい気持ちはある	責任が持てないので関わらないようにする	相手の態度による	声をかけられないように逃げようとする	その時になってみないとわからない	その他	無回答
上段：件数 下段：%											
全体	497 100.0	111 22.3	220 44.3	7 1.4	38 7.6	7 1.4	32 6.4	1 0.2	75 15.1	4 0.8	2 0.4
大変関心がある	90 100.0	37 41.1	30 33.3	0 0.0	3 3.3	0 0.0	10 11.1	0 0.0	9 10.0	0 0.0	1 1.1
関心がある	320 100.0	65 20.3	149 46.6	6 1.9	26 8.1	1 0.3	17 5.3	1 0.3	51 15.9	4 1.3	0 0.0
あまり関心がない	70 100.0	5 7.1	35 50.0	1 1.4	6 8.6	5 7.1	4 5.7	0 0.0	14 20.0	0 0.0	0 0.0
関心がない	5 100.0	1 20.0	2 40.0	0 0.0	1 20.0	1 20.0	0 0.0	0 0.0	0 0.0	0 0.0	0 0.0

福祉への関心別にみると、福祉にあまり関心がない人でも「声をかけられたら手伝える」が多いが、「その時になってみないとわからない」も多くなっている。

問 11 「共生社会」とは、障害の有無に関わりなく、国民誰もが相互に人格と個性を尊重し支えあう社会のことです。あなたは、この「共生社会」という言葉を聞いたことがありますか。また、このような社会のあり方についてどのように考えますか。( S A )



共生社会の認知については、「聞いたことがあり、賛同できる」(47.9%)が最も多く、以下「聞いたことはないが、賛同できる」(35.2%)となっている。

一方、「聞いたことはあるが、賛同できない」は2.2%、「聞いたことはなく、賛同もできない」は1.0%と少なくなっている。

【年齢別】

	調査数 (n)	で聞いたことがあり、賛同	同聞いたことはないが、賛	同聞いたことはないが、賛	も聞いたことはないが、賛同	わからない	無回答
全体	497	238	11	175	5	62	6
	100.0	47.9	2.2	35.2	1.0	12.5	1.2
20～30歳代	128	44	3	62	2	17	0
	100.0	34.4	2.3	48.4	1.6	13.3	0.0
40～50歳代	159	86	1	50	0	22	0
	100.0	54.1	0.6	31.4	0.0	13.8	0.0
60歳以上	206	106	7	63	3	22	5
	100.0	51.5	3.4	30.6	1.5	10.7	2.4

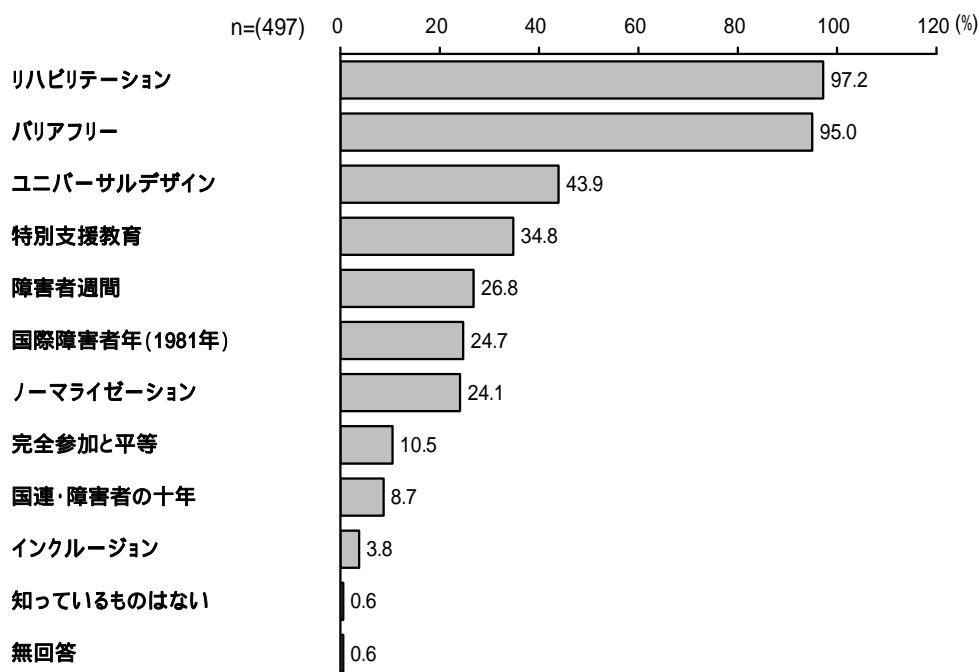
年齢別にみると、40～50歳代と60歳以上では「聞いたことがあり、賛同できる」が多く、20～30歳代では「聞いたことはないが、賛同できる」が多くなっている。

【性別】

	調査数 (n)	で聞いた ことがあり 、賛同	同聞いた ことはない があるが、 賛	同聞いた ことはない が、賛	も聞いた ことはない 、賛同	わからない	無回答
上段：件数 下段：%							
全体	497 100.0	238 47.9	11 2.2	175 35.2	5 1.0	62 12.5	6 1.2
男	210 100.0	113 53.8	4 1.9	61 29.0	3 1.4	28 13.3	1 0.5
女	286 100.0	125 43.7	7 2.4	114 39.9	2 0.7	34 11.9	4 1.4

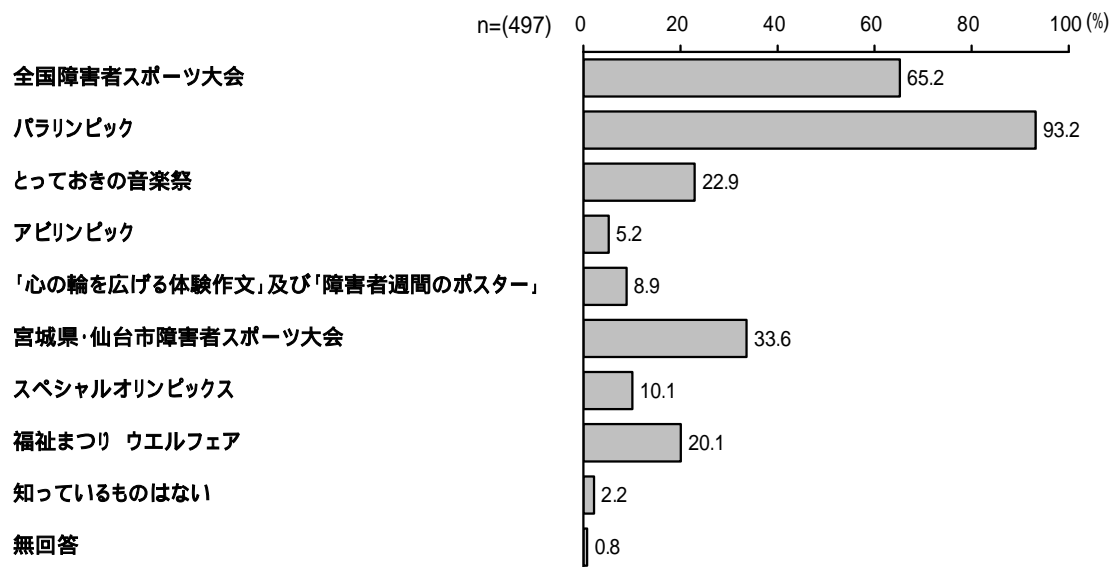
性別にみると、女性では「聞いたことがあり、賛同できる」が多く、男性では「聞いたことはないが、賛同できる」が多くなっている。

問 12 以下にあげる言葉について知っていますか。(MA)



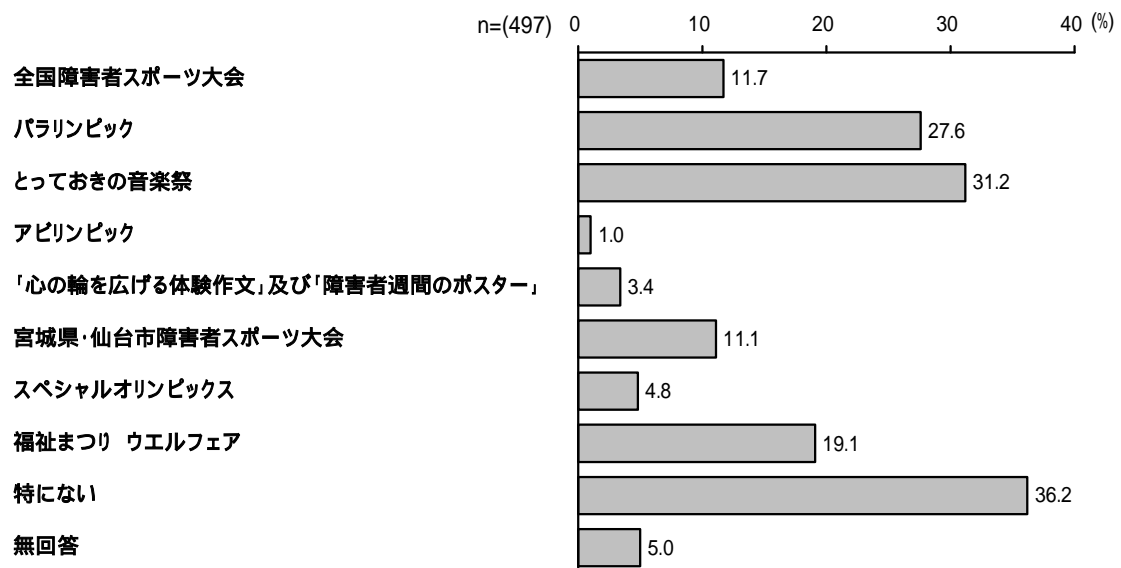
障害者に関わる言葉の認知については、「リハビリテーション」(97.2%)、「バリアフリー」(95.0%)がともに多く、以下「ユニバーサルデザイン」(43.9%)、「特別支援教育」(34.8%)となっている。

問 13 以下にあげる国や仙台市等で行っている障害のある方に関する行事や催し物について知っていますか。(MA)



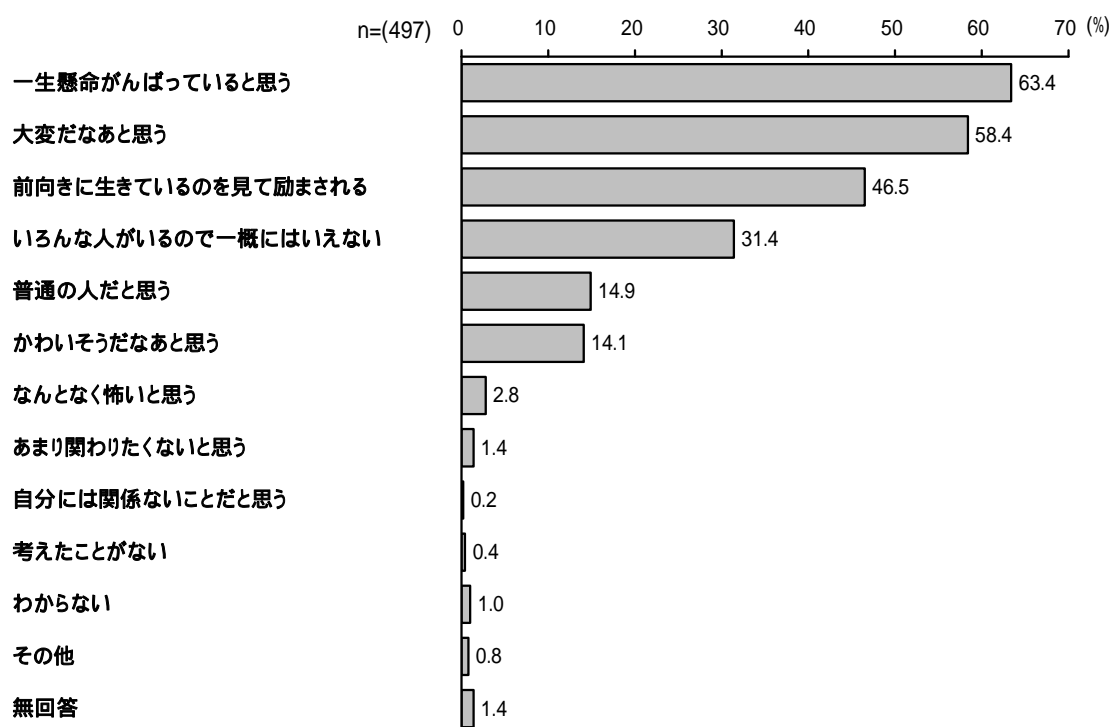
障害者に関わる行事や催し物の認知については、「パラリンピック」(93.2%)が最も多く、以下「全国障害者スポーツ大会」(65.2%)、「宮城県・仙台市障害者スポーツ大会」(33.6%)、「とっておきの音楽祭」(22.9%)、「福祉まつりウエルフェア」(20.1%)となっている。

問 14 以下にあげる国や仙台市等で行っている障害のある方に関する行事や催し物のうち、今後、機会があれば、見に行ったり、参加したいものはありますか。(MA)



障害者に関わる行事や催し物で機会があれば見たり、参加したいものについては、「とっておきの音楽祭」(31.2%)が最も多く、以下「パラリンピック」(27.6%)、福祉まつりウエルフェア」(19.1%)、「全国障害者スポーツ大会」(11.7%)、「宮城県・仙台市障害者スポーツ大会」(11.1%)となっている。

問 15 あなたの障害者に対するイメージは下記のうちどれにあてはまりますか。(MA)



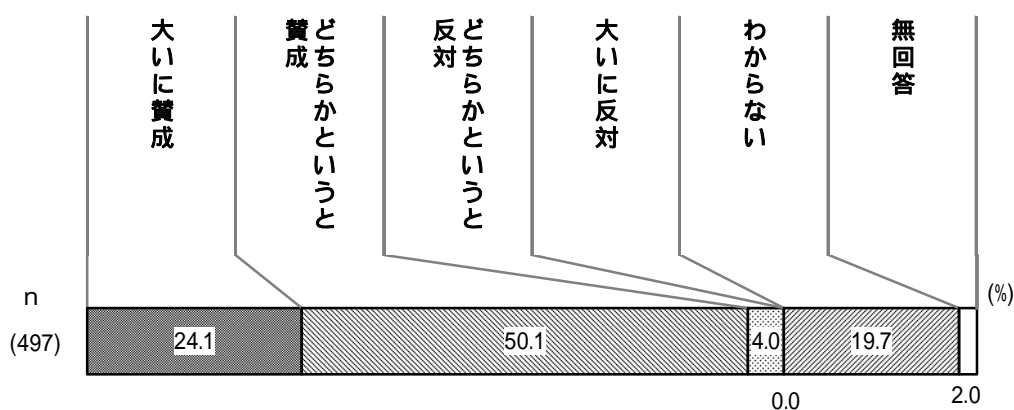
障害者のイメージについては、「一生懸命がんばっていると思う」(63.4%)が最も多く、以下「大変だなあと思う」(58.4%)、「前向きに生きているのを見て励まされる」(46.5%)、「いろんな人がいるので一概にはいえない」(31.4%)となっている。

【性別】

	調査数 (n)	一生懸命がんばっていると思う	大変だなあと思う	前向きに生きているのを見て励まされる	いろんな人がいるので一概にはいえない	普通の人だと思う	かわいそうだなあと思う	なんとなく怖いと思う	あまり関わりたくないと思う	自分には関係ないことだと思う	考えたことがない	わからない	その他	無回答
全体	497	315	290	231	156	74	70	14	7	1	2	5	4	7
男	210	133	127	80	64	30	40	4	1	0	0	5	3	4
女	286	182	163	150	91	44	30	10	6	1	2	0	1	3
	100.0	63.4	58.4	46.5	31.4	14.9	14.1	2.8	1.4	0.2	0.4	1.0	0.8	1.4

性別にみると、女性では「前向きに生きているのを見て励まされる」が多く、男性では「かわいそうだなあと思う」が多くなっている。

問 16 あなたは障害のある人が施設や病院から退所・退院し、グループホームやアパート・借家等を利用して、地域で生活することについてどうお考えですか。( S A )



障害者が地域で暮らすことについては、「大いに賛成」(24.1%)と「どちらかという賛成」(50.1%)を合わせた《賛成》は74.2%となっている。

一方、「どちらかという反対」は4.0%となっている。「大いに反対」はいなかった。

【身近な障害者の有無別】

	調査数 (n)	大いに賛成	どちらかという賛成	どちらかという反対	大いに反対	わからない	無回答
上段：件数 下段：%							
全体	497 100.0	120 24.1	249 50.1	20 4.0	0 0.0	98 19.7	10 2.0
自分自身または家族等身近な親族	217 100.0	61 28.1	106 48.8	9 4.1	0 0.0	37 17.1	4 1.8
自分の職場	97 100.0	23 23.7	50 51.5	7 7.2	0 0.0	17 17.5	0 0.0
仕事関係(自分の職場以外)	62 100.0	18 29.0	29 46.8	2 3.2	0 0.0	12 19.4	1 1.6
町内会	110 100.0	29 26.4	53 48.2	3 2.7	0 0.0	23 20.9	2 1.8
趣味等の活動	26 100.0	8 30.8	15 57.7	1 3.8	0 0.0	2 7.7	0 0.0
よく利用する商店	10 100.0	2 20.0	6 60.0	0 0.0	0 0.0	1 10.0	1 10.0
身近にいたことはない	73 100.0	18 24.7	39 53.4	3 4.1	0 0.0	11 15.1	2 2.7
その他	54 100.0	15 27.8	25 46.3	5 9.3	0 0.0	9 16.7	0 0.0
わからない	16 100.0	4 25.0	4 25.0	1 6.3	0 0.0	6 37.5	1 6.3

身近な障害者の有無別にみると、自分の職場に障害者がいる人では「どちらかという反対」がやや多くなっている。



問 17 問 16 において「3 どちらかという反対」または「4 大いに反対」を選択した方におたずねします。

その理由は何ですか。(カッコ内に理由をご記入ください)

「どちらかという反対」(20件)の内容は次のようになっている。

「接し方がわからない。何か問題が起きそうで不安。事件が起きないか不安。」

「障害のある方が一般のアパートや借家に自立して生活することは(共存共栄又はバリアフリー)問題が地域の理解が良であれば賛成である。」

「例えばその人が困っていたり、または迷惑になるくらい奇声をあげていたりしたときに、どう接していいかわからない、という人が多いと思う。」

「何が起きるかわからないから。」

「迷惑がかかるのは嫌だから。何も問題なく生活可能であれば賛成です。」

「支援が完全にできるようになるまで。」

「何か問題を起こしそう。(本人にその自覚がなくても)」

「支援が不十分で危険(不安)を感じる。」

「行政、家族、就労支援等サポートのシステムが十分整っているとは思えないので。」

「現状では、その環境整備が不十分で不完全であると考えられるため。」

「危険。」

「障害者の自立を促すという意味で地域移行を目指していると思いますが、地域住民が障害者が来るということを肯定的に捉えてない(障害者に対する差別、偏見が未だに根強い)ことに加え、雇用の面でも健常者と同等水準の給料が出ないことには一人暮らしは難しいと思います。」

「町内に積極的に手伝ってくれそうな人があまりいないので、生活するには不便だと思う。」

「障害者とすべて同じ目線で見るのは無理がある。怖いのは最近多くなった精神障害者への対応である。」

「自分は看護師で、障害者に対する知識はあるものの、問 15 で答えたようなイメージがあって、本当に地域で生活できるの? 1人にいるときに発症したらどうするの? という思いが強いから。大変、このように考えてしまって申し訳ないですが。」

「障害の程度によっては、危険であるため。」

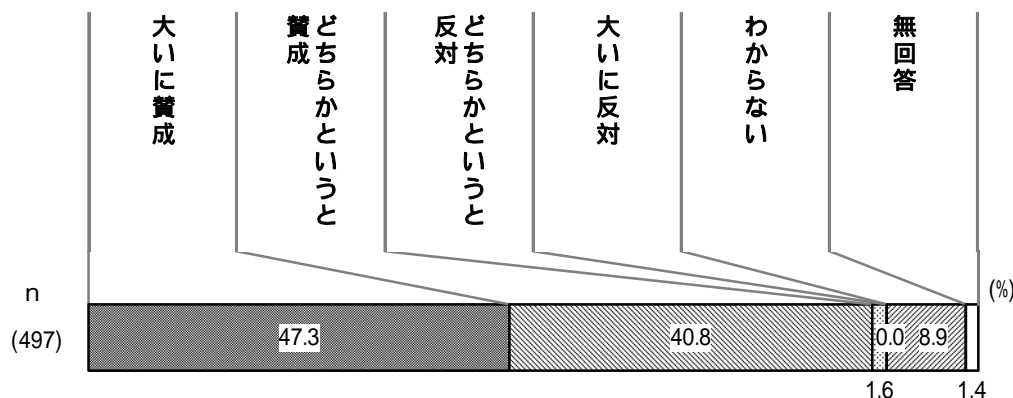
「精神的障害のある方は見た目ではよくわからないため、甘んじているところがあるように思います。市関係、地域の方との、目配りが大変に必要と思います。」

「その地域で生活するという事は、地域全体が関わらなければいけない。」

「完全に自立していれば良いが、特に精神障害のある方が他の援助なくして1人でアパート等で生活してくには、問題も生じてくることも考えられる。」

「退院後、犯罪につながる場合がある。特に精神障害のある方は難しいと思う。」

問 18 あなたの近所の公共施設（学校の空き教室等）を、障害のある方が受けるサービスの場として活用するとしたら々思いますか。（SA）



近所の公共施設を障害者がサービスを受ける場に活用することについては、「大いに賛成」（47.3%）と「どちらかというと賛成」（40.8%）を合わせた《賛成》は88.1%となっている。

一方、「どちらかというと反対」は1.6%となっている。「大いに反対」はいなかった。

【身近な障害者の有無別】

	調査数（n）	大いに賛成	どちらかというと賛成	どちらかというと反対	大いに反対	わからない	無回答
上段：件数 下段：%							
全体	497 100.0	235 47.3	203 40.8	8 1.6	0 0.0	44 8.9	7 1.4
自分自身または家族等身近な親族	217 100.0	111 51.2	80 36.9	3 1.4	0 0.0	19 8.8	4 1.8
自分の職場	97 100.0	43 44.3	44 45.4	2 2.1	0 0.0	7 7.2	1 1.0
仕事関係（自分の職場以外）	62 100.0	28 45.2	27 43.5	2 3.2	0 0.0	4 6.5	1 1.6
町内会	110 100.0	59 53.6	37 33.6	2 1.8	0 0.0	10 9.1	2 1.8
趣味等の活動	26 100.0	18 69.2	8 30.8	0 0.0	0 0.0	0 0.0	0 0.0
よく利用する商店	10 100.0	3 30.0	5 50.0	0 0.0	0 0.0	0 0.0	2 20.0
身近にいたことはない	73 100.0	29 39.7	38 52.1	0 0.0	0 0.0	5 6.8	1 1.4
その他	54 100.0	26 48.1	23 42.6	2 3.7	0 0.0	3 5.6	0 0.0
わからない	16 100.0	4 25.0	6 37.5	0 0.0	0 0.0	5 31.3	1 6.3

身近な障害者の有無別にみると、自分自身または家族等身近な親族に障害者がいる人、自分の職場に障害者がいる人、仕事関係（自分の職場以外）に障害者がいる人、町内会に障害者がいる人では「どちらかというと反対」が少数だがいる。

問 19 問 18 において「3 どちらかという反対」または「4 大いに反対」を選択した方におたずねします。

その理由は何ですか。(カッコ内に理由をご記入ください)

「どちらかという反対」(8件)の内容は次のようになっている。

「接し方がわからない。何か問題が起きそうで不安。事件が起きないか不安。」

「障害といっても色々あるので、なんとなくこわい感じを心配する。」

「どのような障害か程度による。障害と一言で言われても困る。」

「何故、障害者だけなのか？元気な高齢者やサービスを受けるべき人はたくさんいる。一見でわかる人とわからない人がいるので、障害者だけがサービスを受ける権利者ではない。」

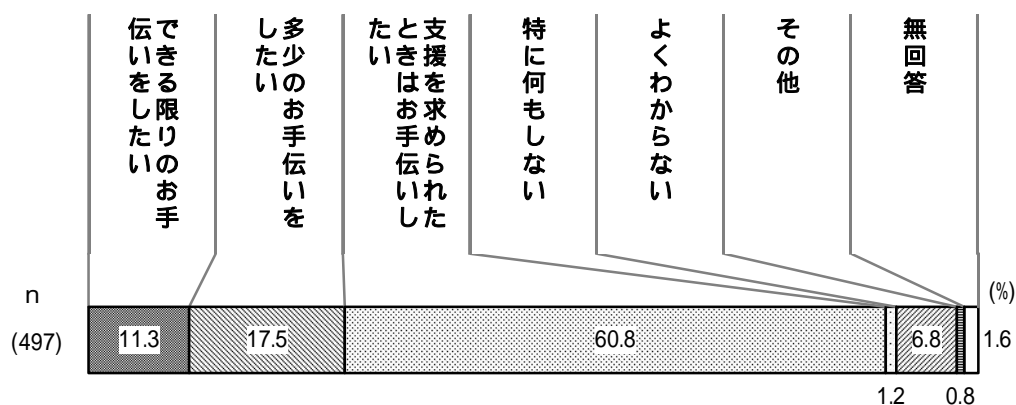
「市が個人やNPOの団体のような方に任せるだけでなく、市が責任を持って行うのなら大賛成です。」

「もっと市民に障害者についての知識を与えたいと思うべき。」

「一般の利用者が皆、障害のある方のことを理解し、受け入れてくれるとは限らないと思うから。」

「色々な人と接触があるから、危険な面もあると思うから。」

問20 あなたのご近所で、障害などのために困っている世帯があったらどのような対応をしたいと思いますか。(SA)



近所に障害のため困っている家庭があるときの対処については、「支援を求められたときはお手伝いをしたい」(60.8%)が最も多く、以下「多少のお手伝いをしたい」(17.5%)、「できる限りのお手伝いをしたい」(11.3%)となっている。

【年齢別】

	調査数 (n)	できる限りのお手伝いをしたい	多少のお手伝いをしたい	支援を求められたときはお手伝いをしたい	特に何もしない	よくわからない	その他	無回答
上段：件数 下段：%								
全体	497 100.0	56 11.3	87 17.5	302 60.8	6 1.2	34 6.8	4 0.8	8 1.6
20～30歳代	128 100.0	11 8.6	19 14.8	85 66.4	4 3.1	6 4.7	1 0.8	2 1.6
40～50歳代	159 100.0	14 8.8	30 18.9	105 66.0	1 0.6	8 5.0	1 0.6	0 0.0
60歳以上	206 100.0	31 15.0	38 18.4	109 52.9	1 0.5	20 9.7	2 1.0	5 2.4

年齢別にみると、年齢が高くなるにしたがって「できる限りのお手伝いをしたい」が多いが、「よくわからない」も多くなっている。

【性別】

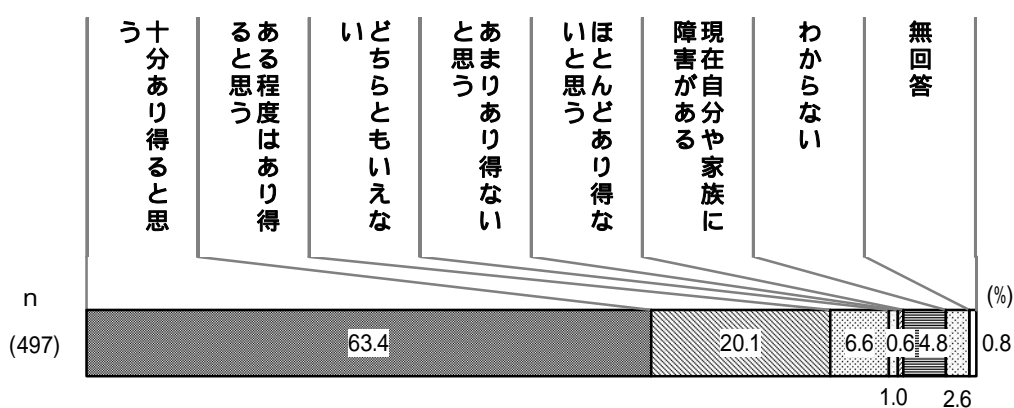
	調査数 (n)	できる 限りの お手伝いを したい	多少の お手伝いを したい	支援を 求められた ときは お手伝い したい	特に 何も しない	よく わから ない	その他	無 回答
上段：件数 下段：%								
全体	497 100.0	56 11.3	87 17.5	302 60.8	6 1.2	34 6.8	4 0.8	8 1.6
男	210 100.0	24 11.4	43 20.5	116 55.2	2 1.0	20 9.5	2 1.0	3 1.4
女	286 100.0	32 11.2	44 15.4	185 64.7	4 1.4	14 4.9	2 0.7	5 1.7

性別にみると、女性では「支援を求められたときはお手伝いしたい」が多く、男性では「多少のお手伝いをしたい」が多くなっている。

問21 障害者になる原因等はさまざまあります。

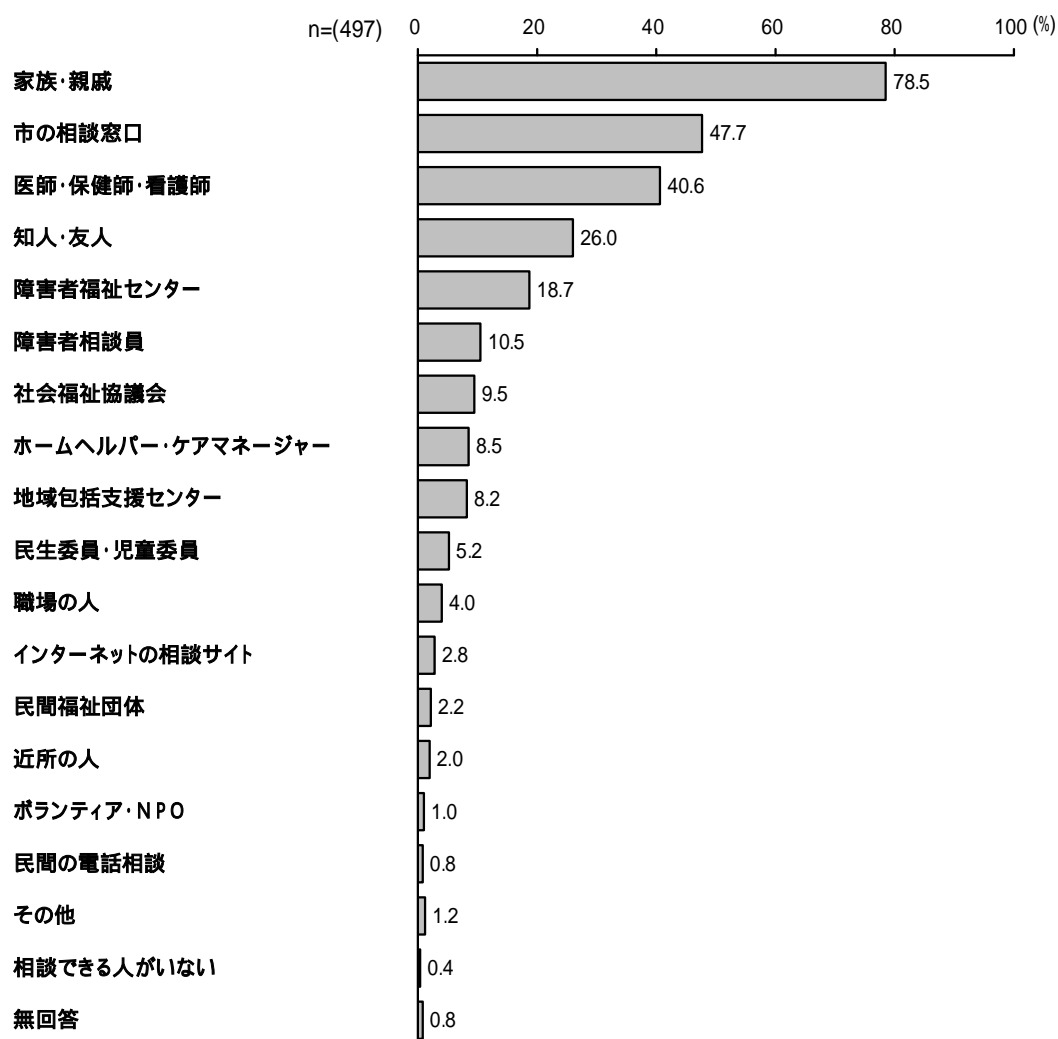
例 「交通事故に遭い歩けなくなった。」「病気（糖尿病等）により目が見えなくなった。」  
「仕事のストレスにより重い精神病にかかって人間関係がうまく行かなくなった。」

あなたは、将来において、自分や家族が障害のある状態になることがあり得ると思いますか。  
(SA)



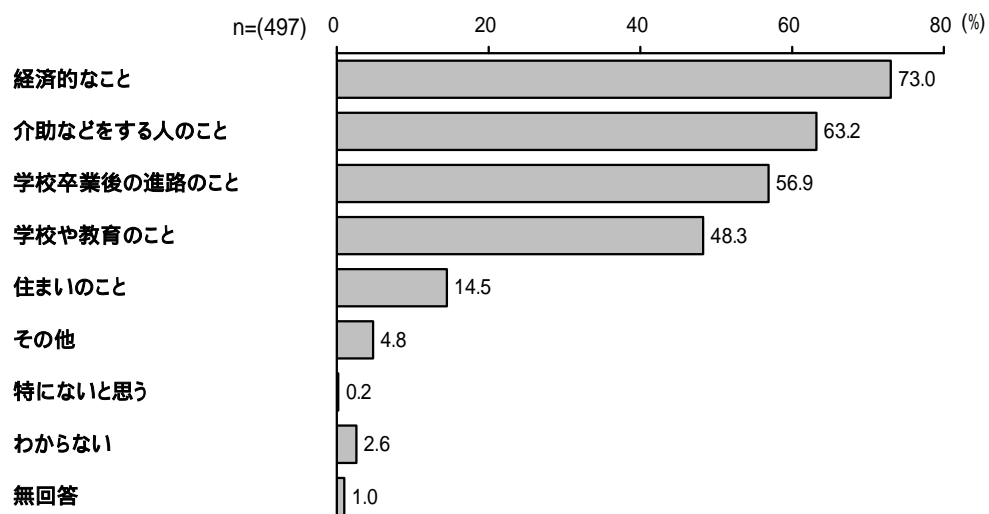
自分や家族が障害者になることがあり得るかについて、「十分あり得ると思う」(63.4%) が最も多く、以下「ある程度はあり得ると思う」(20.1%)、「どちらともいえない」(6.6%)、「現在自分や家族に障害がある」(4.8%) となっている。

問22 もしもあなたが問21の事例のようになった場合、誰に相談したいと思いますか。(MA)



自分が障害者になったときの相談先については、「家族・親戚」(78.5%)が最も多く、以下「市の相談窓口」(47.7%)、「医師・保健師・看護師」(40.6%)、「知人・友人」(26.0%)、「障害者福祉センター」(18.7%)となっている。

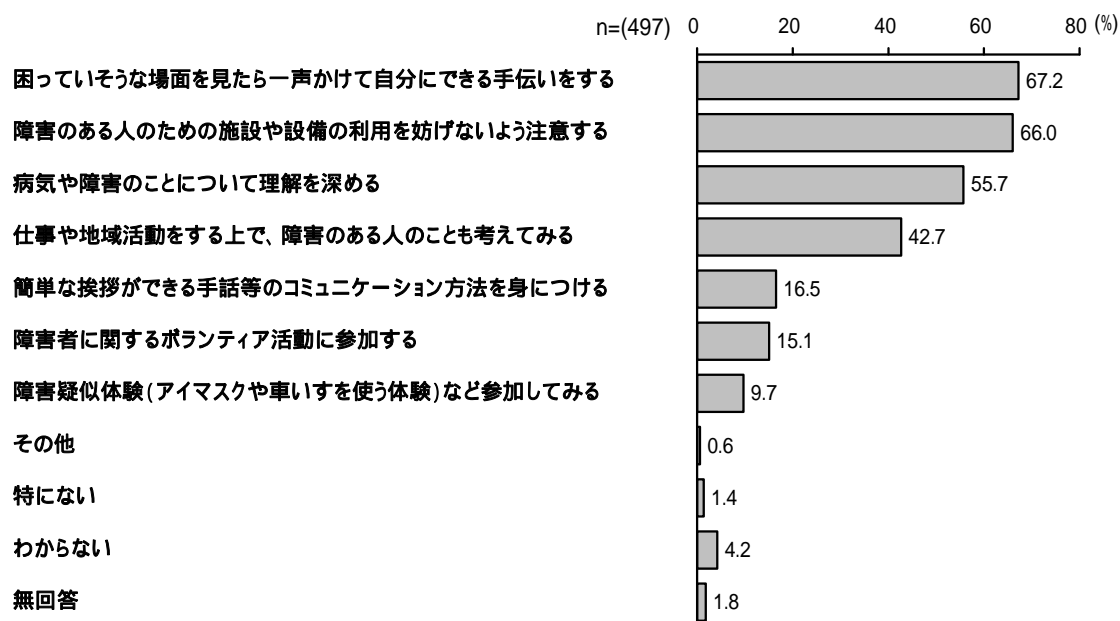
問23 もしあなたや身内の方が障害児（脳性麻痺により歩けない、発達に遅れが見られるなど）をもつ親になったとき、特に困ることはどんなことだと思いますか。（MA）



障害児の親になったとき、特に困ると思うことについては、「経済的なこと」(73.0%)が最も多く、以下「介助などをする人のこと」(63.2%)、「学校卒業後の進路のこと」(56.9%)、「学校や教育のこと」(48.3%)となっている。



問24 障害のある方の社会参加の機会を広げるために、あなた自身にできると思われることは何ですか。(MA)



障害者の社会参加のためにできることについては、「困っていきそうな場面を見たら一声かけて自分にできる手伝いをする」(67.2%)、「障害のある人のための施設や設備の利用を妨げないように注意する」(66.0%)がともに多く、以下「病気や障害のことについて理解を深める」(55.7%)、「仕事や地域活動をする上で、障害のある人のことも考えてみる」(42.7%)となっている。

【年齢別】

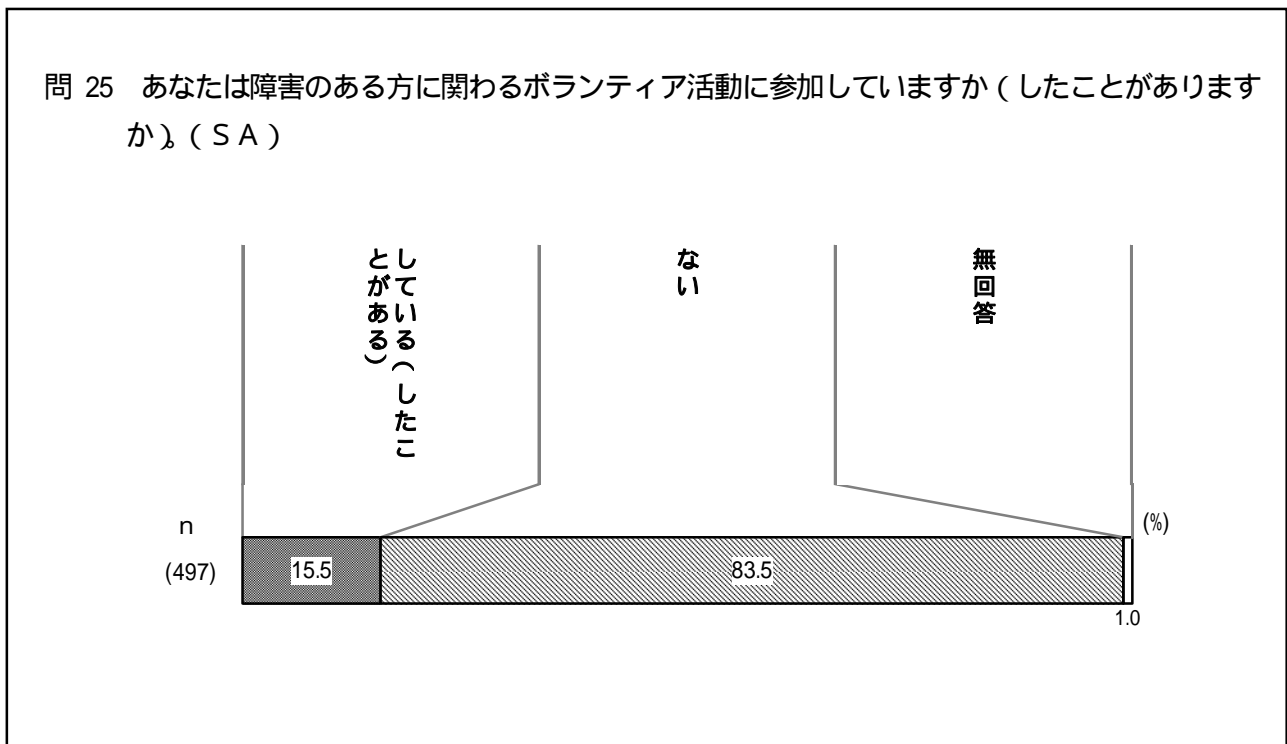
	調査数 (n)	きた困る手一て伝声いいかそうな場分面にで見	い設障のよや設の注のるす利用のた妨めけのな施	て病理解やを障害の深めることについ	もで仕考え障や害地活ある動人をするここと上	方等簡の単な挨拶がでできるシヨ手話	テイア者に関動に参加する	なク障や参加しすを体験(アイマス	その他	特にない	わからない	無回答
全体	497 100.0	334 67.2	328 66.0	277 55.7	212 42.7	82 16.5	75 15.1	48 9.7	3 0.6	7 1.4	21 4.2	9 1.8
20～30歳代	128 100.0	77 60.2	103 80.5	74 57.8	54 42.2	29 22.7	18 14.1	15 11.7	1 0.8	2 1.6	2 1.6	0 0.0
40～50歳代	159 100.0	108 67.9	110 69.2	99 62.3	78 49.1	29 18.2	28 17.6	18 11.3	0 0.0	1 0.6	2 1.3	3 1.9
60歳以上	206 100.0	149 72.3	112 54.4	102 49.5	79 38.3	24 11.7	29 14.1	14 6.8	2 1.0	4 1.9	16 7.8	6 2.9

年齢別にみると、年齢が高くなるにしたがって「困っていきそうな場面を見たら一声かけて自分にできる手伝いをする」が多く、年齢が低くなるにしたがって「障害のある人のための施設や設備の利用を妨げないように注意する」、「簡単な挨拶ができる手話等のコミュニケーション方法を身につける」が多くなっている。

【性別】

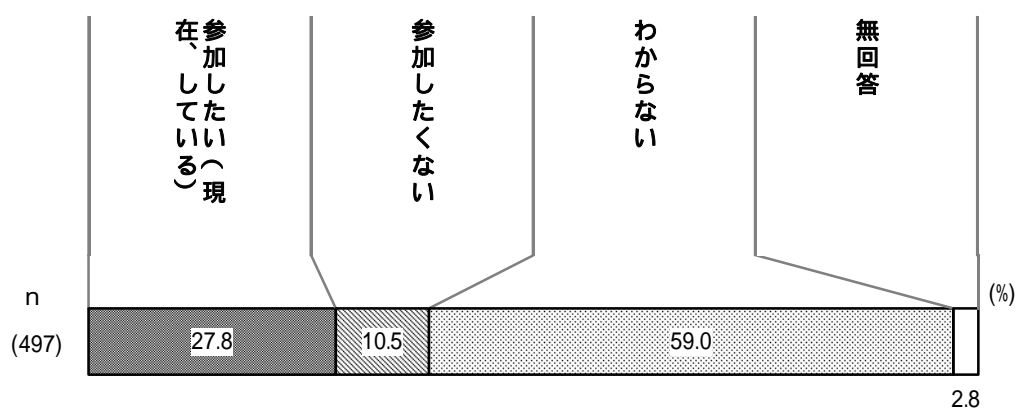
調査数 (n)	きたら手伝いをす	困っていきそう	い設や設備の注	障害のある人の	て病理解を深め	もで仕事や障	方法や地域活動	簡単な挨拶がで	障害者活動に参	障害疑似体験	その他	特にな	わからない	無回答
上段：件数 下段：%														
全体	497 100.0	334 67.2	328 66.0	277 55.7	212 42.7	82 16.5	75 15.1	48 9.7	3 0.6	7 1.4	21 4.2	9 1.8		
男	210 100.0	128 61.0	133 63.3	116 55.2	91 43.3	36 17.1	24 11.4	18 8.6	1 0.5	4 1.9	9 4.3	2 1.0		
女	286 100.0	206 72.0	194 67.8	160 55.9	121 42.3	46 16.1	51 17.8	30 10.5	2 0.7	3 1.0	12 4.2	7 2.4		

性別にみると、女性では「困っていきそうな場面を見たら一声かけて自分にできる手伝いをする」、「障害者に関するボランティア活動に参加する」が多くなっている。



障害者に関わるボランティア活動参加の有無については、「ない」が83.5%を占めている。

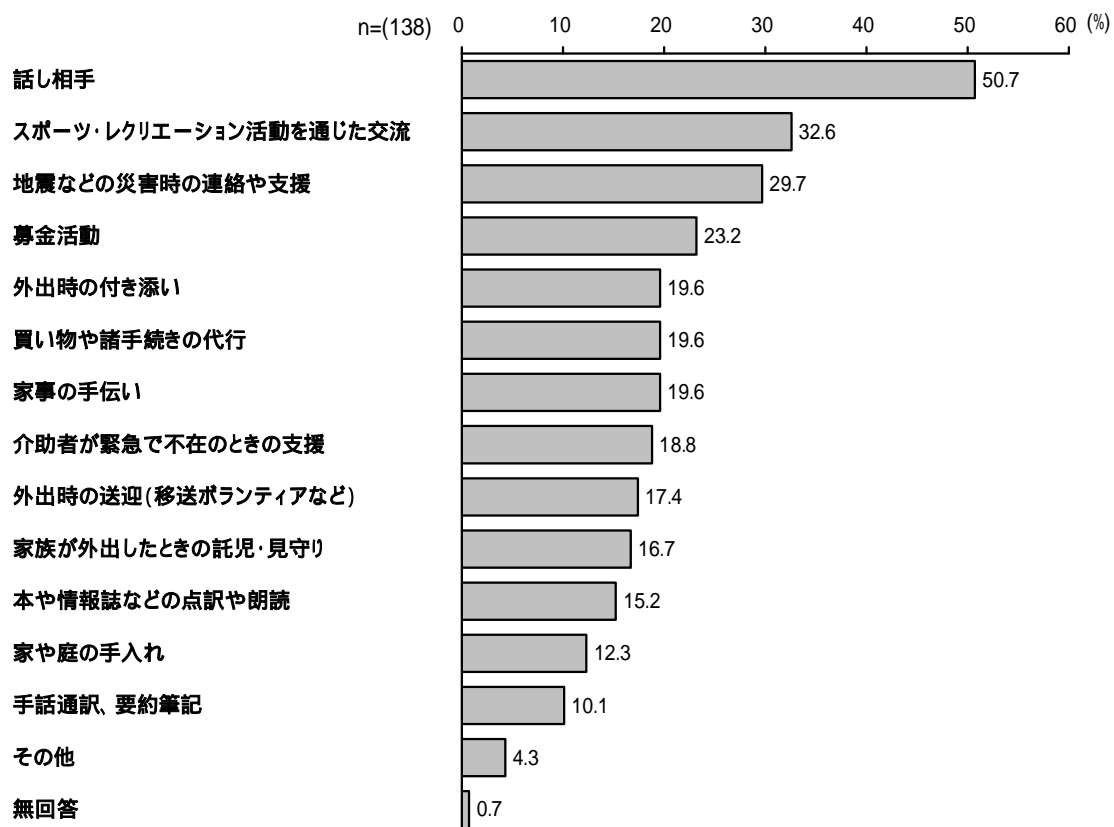
問 26 今後、障害のある方と関わるボランティア活動へ参加したいと思いますか。( S A )



今後、障害者に関わるボランティア活動参加の意向については、「参加したい(現在、している)」が27.8%、「参加したくない」が10.5%となっている。  
なお、「わからない」は59.0%となっている。

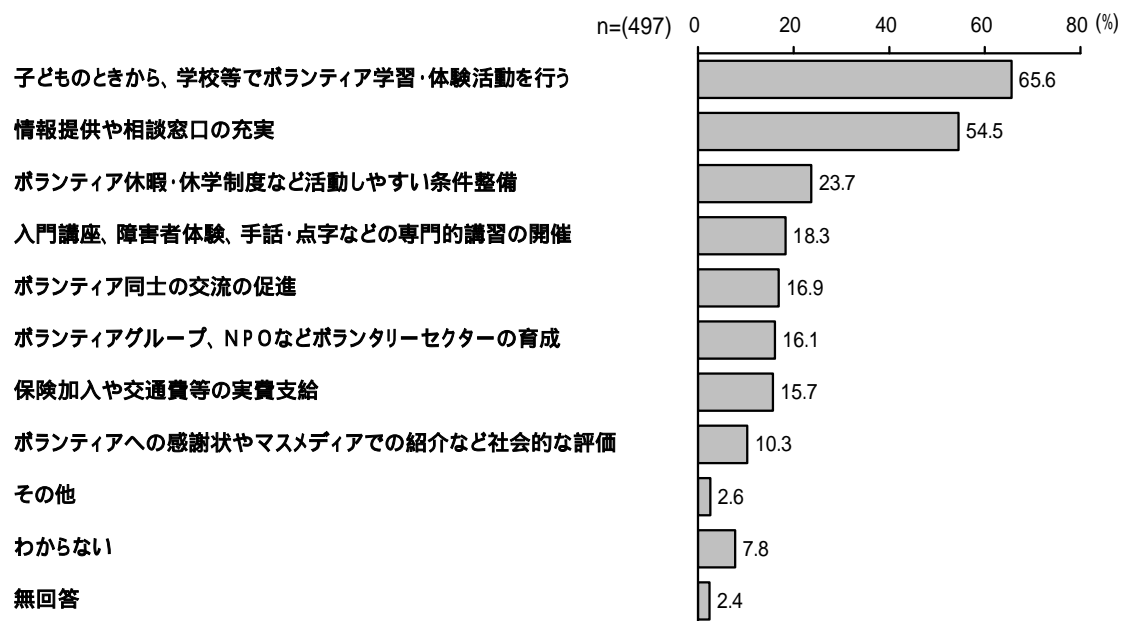
問 27 問 26 において「1 参加したい(現在、している)」を選択した方におたずねします。

あなたが今後参加したい(あるいは、現在、している)障害のある方に関わるボランティア活動は次のどれですか。(MA)



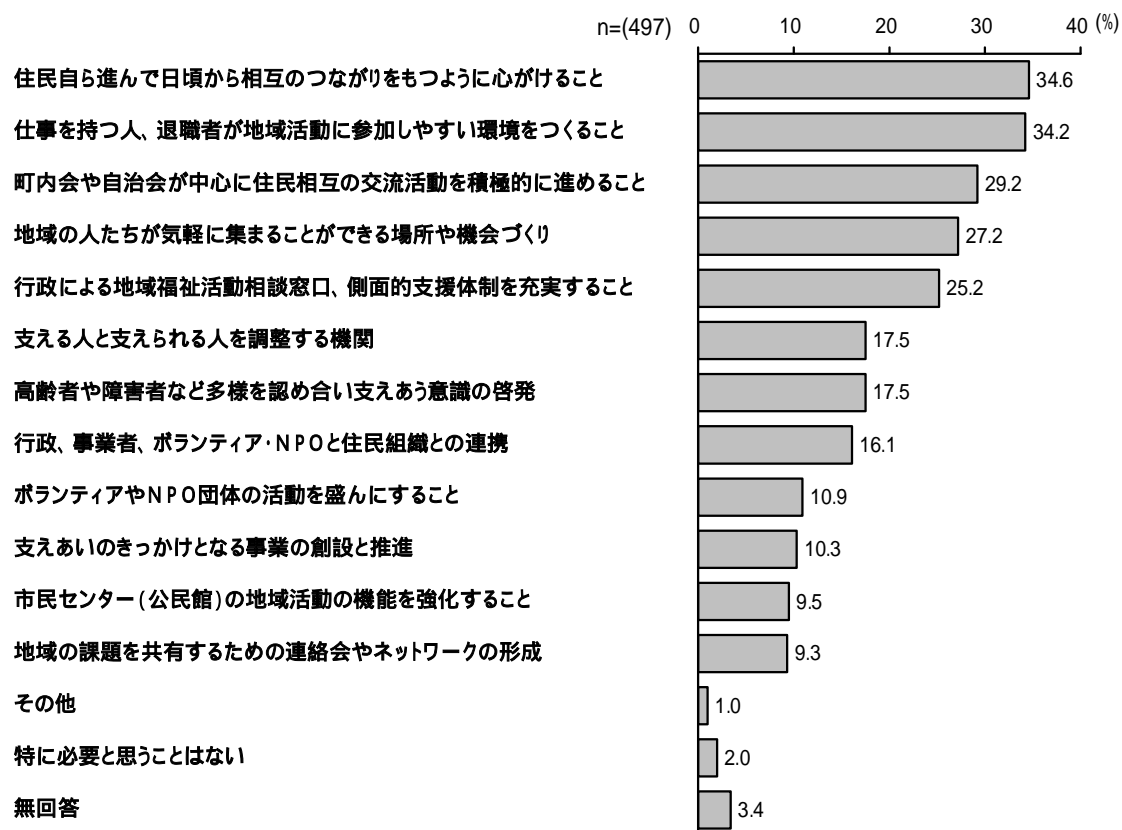
今後参加したい障害者に関わるボランティア活動については、「話し相手」(50.7%)が最も多く、以下「スポーツ・レクリエーション活動を通じた交流」(32.6%)、「地震などの災害時の連絡や支援」(29.7%)、「募金活動」(23.2%)となっている。

問 28 障害のある人に関わるボランティア活動を活発にするためにはどのようなことが必要だとお考えですか。(MA)



障害者に関わるボランティア活動を活発にするために必要なことについては、「子どものときから、学校等でボランティア活動・体験活動を行う」(65.6%)が最も多く、以下「情報提供や相談窓口の充実」(54.5%)、「ボランティア休暇・休学制度など活動しやすい条件整備」(23.7%)となっている。

問29 地域における住民相互の支えあいの仕組みづくりで、あなたが特に必要だと思うことはどのようなことですか。(MA)



地域における住民相互の支えあいの仕組みづくりで必要なことについては、「住民自ら進んで日頃から相互のつながりをもつように心がけること」(34.6%)、「仕事を持つ人、退職者が地域活動に参加しやすい環境をつくること」(34.2%)がともに多く、以下「町内会や自治会が中心となって住民相互の交流活動を積極的に進めること」(29.2%)、「行政による地域福祉活動相談窓口、側面的支援体制を充実すること」(25.2%)となっている。

なお、「特に必要と思うことはない」は2.0%となっている。

【年齢別】

調査数 (n)	住民相互のつながりを大切にする	住民自ら進んで日頃から環境活動に参加しやすい	仕事をもち、退職者が地域活動に参加しやすい	町内会や自治会が中心に住民相互の交流活動を積極的に進めること	町内会や自治会が中心に住民相互の交流活動を積極的に進めること	町内会や自治会が中心に住民相互の交流活動を積極的に進めること	町内会や自治会が中心に住民相互の交流活動を積極的に進めること	町内会や自治会が中心に住民相互の交流活動を積極的に進めること	町内会や自治会が中心に住民相互の交流活動を積極的に進めること	町内会や自治会が中心に住民相互の交流活動を積極的に進めること	町内会や自治会が中心に住民相互の交流活動を積極的に進めること	町内会や自治会が中心に住民相互の交流活動を積極的に進めること	町内会や自治会が中心に住民相互の交流活動を積極的に進めること
上段：件数 下段：%													
全体	497 100.0	172 34.6	170 34.2	145 29.2	135 27.2	125 25.2	87 17.5	87 17.5	80 16.1	54 10.9	51 10.3	47 9.5	46 9.3
20～30歳代	128 100.0	46 35.9	52 40.6	33 25.8	38 29.7	19 14.8	25 19.5	12 9.4	19 14.8	13 10.2	19 14.8	9 7.0	8 6.3
40～50歳代	159 100.0	53 33.3	68 42.8	30 18.9	31 19.5	50 31.4	38 23.9	29 18.2	29 18.2	15 9.4	20 12.6	12 7.5	19 11.9
60歳以上	206 100.0	72 35.0	48 23.3	82 39.8	65 31.6	53 25.7	24 11.7	45 21.8	32 15.5	25 12.1	12 5.8	26 12.6	19 9.2

調査数 (n)	その他	特に必要と思うことは	無回答
上段：件数 下段：%			
全体	5 1.0	10 2.0	17 3.4
20～30歳代	1 0.8	4 3.1	2 1.6
40～50歳代	3 1.9	2 1.3	3 1.9
60歳以上	1 0.5	3 1.5	12 5.8

年齢別にみると、40～50歳代では「行政による地域福祉活動相談窓口、側面的支援体制を充実すること」、  
「支える人と支えられる人を調整する機関」が多く、60歳以上では「町内会や自治会が中心に住民相互の  
交流活動を積極的に進めること」が多くなっている。

問30 問29において「14 特に必要と思うことはない」を選択した方におたずねします。

その理由は何ですか。(SA)

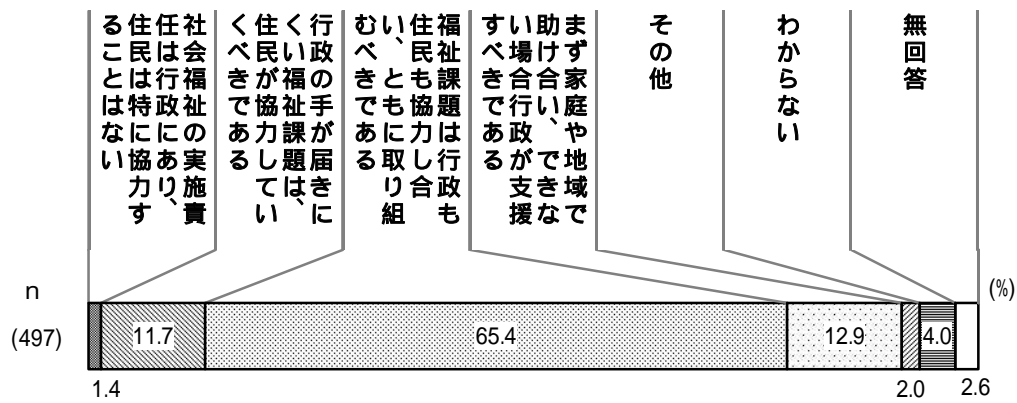
(上段：件数、下段：%)

調査数	あが地 る全域 か面的 ら社会 にの課 対題は 応すは すべき 行政	く他 てもと 生の関 活わり が可 能だも かた らな	ら個 々の責 任、生 活は自 覚の一 問人 題ひ だど かり	が友 あ人 れ・知 ば人 十との 分だ だの結 らび つ つき	そ の 他	無 回 答
10 100.0	1 10.0	1 10.0	3 30.0	3 30.0	1 10.0	1 10.0

地域における住民相互の支えあいの仕組みづくりが必要と思わない理由については、「個々の生活は一人ひとりの責任、自覚の問題だから」、「友人・知人との結びつきがあれば十分だから」(ともに3件)、「地域社会の課題は、行政が全面的に対応すべきであるから」、「他人との関わりをもたなくても生活が可能だから」(ともに1件)となっている。

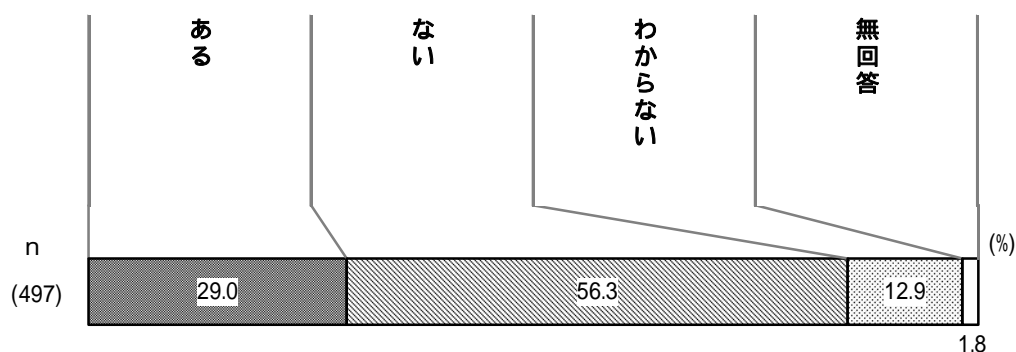


問 31 福祉サービスを充実させていく上で、行政と地域住民との関係について、あなたのお考えに最も近いものを選んでください。(SA)



福祉サービスを充実させる上で行政と地域住民の関係についてについては、「福祉課題については、行政も住民も協力し合い、ともに取り組むべきである」(65.4%)が最も多く、以下「まず家庭や地域で助け合い、できない場合に行政が支援すべきである」(12.9%)、「行政の手が届きにくい福祉課題については、住民が協力していきべきである」(11.7%)となっている。

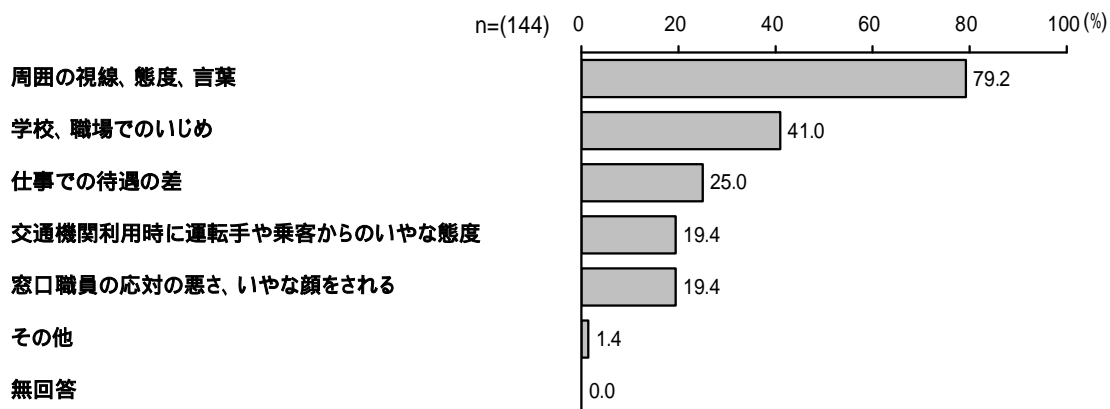
問 32 障害を理由とした差別、無視やいやがらせなどを見たことがありますか。( S A )



障害を理由にした差別やいやがらせを見たことについては、「ある」が29.0%、「ない」が56.3%となっている。

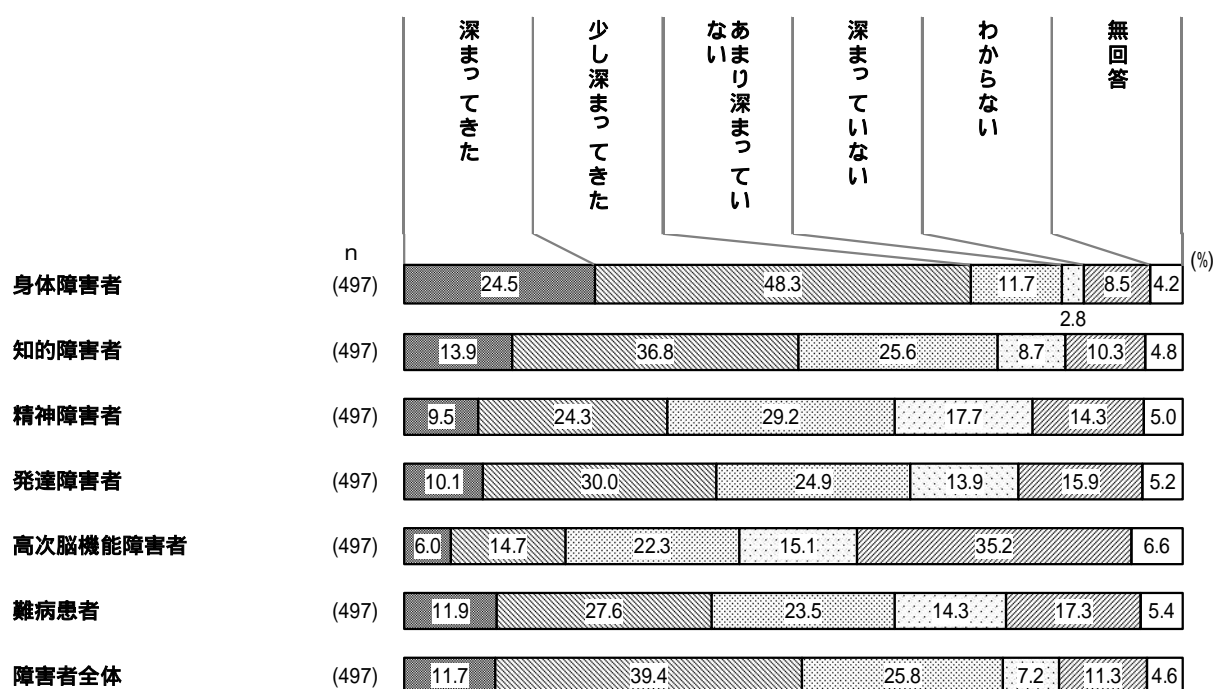
問 33 問 32 において「 1 ある 」を選択した方におたずねします。

それはどのような内容でしたか。( MA )



見た差別やいやがらせの内容については、「周囲の視線、態度、言葉」(79.2%)が最も多く、以下「学校、職場でのいじめ」(41.0%)、「仕事での待遇の差」(25.0%)、「交通機関利用時に運転手や乗客からのいやな態度」、「窓口職員の対応の悪さ、いやな顔をされる」(ともに19.4%)となっている。

問34 障害のある方への理解は深まってきていると思いますか。障害別と障害者全体についてお答えください。(SA)

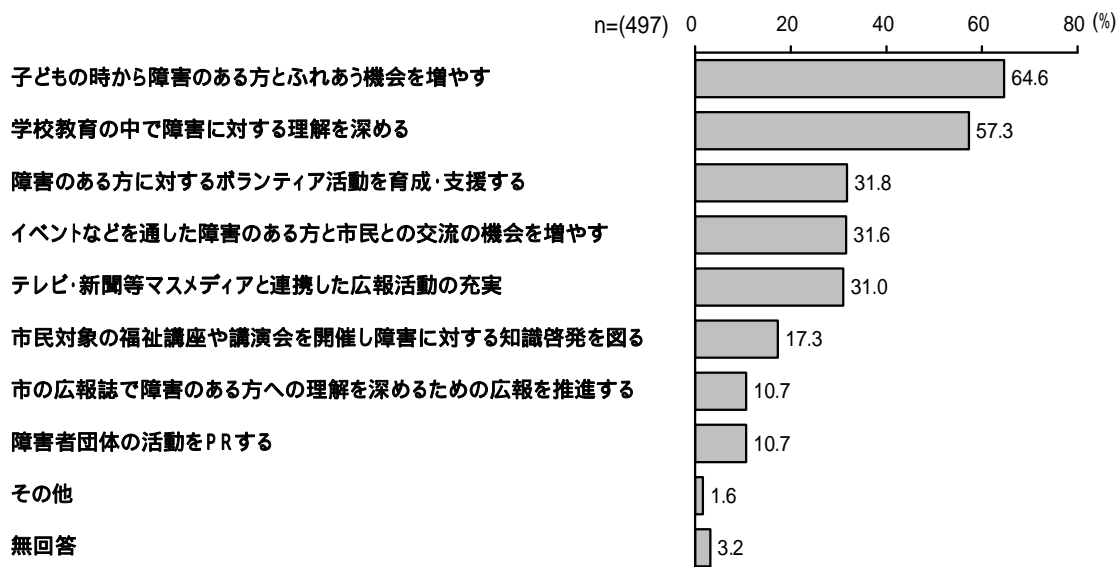


障害者への理解については、「深まってきた」と「少し深まってきた」を合わせた《深まってきた》は、「身体障害者」(72.8%)が最も多く、以下「知的障害者」(50.7%)、「発達障害者」(40.1%)、「難病患者」(39.5%)、「精神障害者」(33.8%)、「高次脳機能障害者」(20.7%)となっている。「障害者全体」では51.1%となっている。

一方、「深まっていない」と「あまり深まっていない」を合わせた《深まっていない》は、「精神障害者」(46.9%)が最も多く、以下「発達障害者」(38.8%)、「難病患者」(37.8%)、「高次脳機能障害者」(37.4%)、「知的障害者」(34.3%)、「身体障害者」(14.5%)となっている。「障害者全体」では33.0%となっている。

なお、「高次脳機能障害者」では「わからない」が35.2%となっている。

問 35 あなたは障害のある人に対する理解を深めるためにどのような取り組みが必要だと思いますか。  
(MA)



障害者への理解を深めるために必要な取り組みについては、「子どもの時から障害のある人とふれあう機会を増やす」(64.6%)が最も多く、以下「学校教育の中で障害に対する理解を深める」(57.3%)、「障害のある人に対するボランティア活動を育成・支援する」(31.8%)、「イベントなどを通じた障害のある方と市民との交流の機会を増やす」(31.6%)、「テレビ・新聞等マスメディアと連携した広報活動の充実」(31.0%)となっている。

【年齢別】

	調査数 (n)	子どもの時からふれあう機会を増やす	学校教育の中で障害に対する理解を深める	障害のある方に対するボランティア活動を育成・支援する	イベントなどを通じた障害のある方と市民との交流の機会を増やす	テレビ・新聞等マスメディアと連携した広報活動の充実	市民対象の福祉講座や講演会を開催し障害に対する知識啓発を図る	市の広報誌で障害のある方への理解を深めるための広報を推進する	障害者団体の活動をPRする	その他	無回答
全体	497	321	285	158	157	154	86	53	53	8	16
	100.0	64.6	57.3	31.8	31.6	31.0	17.3	10.7	10.7	1.6	3.2
20～30歳代	128	93	76	36	41	46	18	10	9	5	0
	100.0	72.7	59.4	28.1	32.0	35.9	14.1	7.8	7.0	3.9	0.0
40～50歳代	159	111	92	50	41	56	28	16	20	0	3
	100.0	69.8	57.9	31.4	25.8	35.2	17.6	10.1	12.6	0.0	1.9
60歳以上	206	116	113	72	74	51	38	27	24	3	13
	100.0	56.3	54.9	35.0	35.9	24.8	18.4	13.1	11.7	1.5	6.3

年齢別にみると、年齢が高くなるにしたがって、「障害のある方に対するボランティア活動を育成・支援する」が多く、年齢が低くなるにしたがって「子どもの時から障害のある方とふれあう機会を増やす」が多くなっている。

【福祉への関心別】

調査数（n）	やす る方 とふ れあ う機 会を の増 あ	子 ども の時 から 障害 のあ る方 とふ れあ う機 会を の増 あ	学 校教 育の 中で 障害 に対 する 理解 を深 める	支 援す るテ ィア 活動 を対 する ボ ルン タ ー	障 害の ある 方と 市民 との 交 渉の 機会 を増 やす	流 害の ある 方と 市民 との 交 渉の 機会 を増 やす	イ ベン トな どを 通し た障 害の ある 方と 市民 との 交 渉の 機会 を増 やす	動 の充 実と 連 携し た広 報メ ディア ・新 聞等 マス コミ	市 民対 象の 福祉 講座 や講 演会 を催 し障 害に 対す る知 識啓 蒙を 図る	市 民対 象の 福祉 講座 や講 演会 を催 し障 害に 対す る知 識啓 蒙を 図る	市 民対 象の 福祉 講座 や講 演会 を催 し障 害に 対す る知 識啓 蒙を 図る	障 害者 団体 の活 動を PR する	そ の他	無 回 答	
上段：件数 下段：%															
全体	497 100.0	321 64.6	285 57.3	158 31.8	157 31.6	154 31.0	86 17.3	53 10.7	53 10.7	8 1.6	16 3.2				
大変関心がある	90 100.0	63 70.0	50 55.6	30 33.3	36 40.0	28 31.1	22 24.4	8 8.9	10 11.1	0 0.0	2 2.2				
関心がある	320 100.0	206 64.4	196 61.3	106 33.1	97 30.3	96 30.0	54 16.9	35 10.9	37 11.6	4 1.3	7 2.2				
あまり関心がない	70 100.0	42 60.0	29 41.4	15 21.4	19 27.1	22 31.4	6 8.6	8 11.4	6 8.6	3 4.3	7 10.0				
関心がない	5 100.0	2 40.0	1 20.0	2 40.0	2 40.0	2 40.0	2 40.0	0 0.0	0 0.0	1 20.0	0 0.0				

福祉への関心別にみると、福祉への関心が高くなるにしたがって「子どもの時から障害のある方とふれあう機会を増やす」が多くなっている。

## 2 市民の自由回答

アンケートに、自由に発言していただける欄を設けたところ、意見数は143件であった。  
以下に主な意見を抜粋し、まとめた。

発達障がい児の教育に係った経験から、一番必要に感じたのは施設や設備よりも、人的サービスを保障することが大切と感じる。イベントなどを増やすことよりも、障がい児(者)の日々の生活をサポートする地道な体制作り、財源を回すことが大切と考える。ボランティアは大切だが、それを期待する前に、障がい児(者)を介護(教育)している現場の労働をこれ以上過酷なものにせず、正式な人員を増やすようにしてほしい。現場の人間が次々倒れています!! 例えば、児童相談所の人員を増やす。学校の普通学級に複数の発達障がい児がいる場合などは、介助員をつける。障がい児の保護者は育児に疲労困憊しているのだろうが、専門医にやつ当たりしたり、問題を他の保護者のせいにするのではなく、障がい児本人の幸福を考え、保護者自身も障がいに対する学習を深めてほしい。

まだまだ障がい者に対する偏見があります。しかしその一方で、若い人たちの中には思いやりの気持ちで接する人たちもいます。車椅子用の場所に健常者が駐車したり、目の不自由な人の妨げになって歩いたり、特に自転車は危ないですね。私たち健常者でも危険な目に遭いそうになりますもの。もっと福祉に対しての情報をメディアやマスコミで流していただければよいと思います。私の父も障がい者です。そのため、それ用の車を用意しました。それらの補助なども考えていただければありがたいと思います。

私は福祉系大学出身ですので、アンケートに記載されております専門用語が理解できますが、一般の方々にとっては、聞き慣れない用語(例えばインクルージョン、地域包括支援センター、発達障がい者、高次脳機能障がい者など)が多いように思われました。また、質問や、選択肢にも表現がわかりづらい箇所が見受けられましたので、それらを修正していただければ、よりよい集計結果が得られるのではないかと思います。

何か手助けできることがあれば行きたいという気持ちはある。どうしていいかわからない、自分がやろうとしている事が障がい者の方にかえて迷惑なのではないかと考えてしまうことがある。また、仕事をしていると、思うように行動できない。私自身、上記のような気持ちでいますが、そういう人は多いのではないのでしょうか。

健常者の障がいを持つ人への意識は高くなっていると思いますが、障がいを持つ人や、その家族の方の意識はどうなのでしょう。障がいがあるから周囲の人が助けてくれるのは当たり前といった考えや、逆に卑屈な態度の方も見受けられます。お互いに支え合うという意識があつてこそ、私たちも気持ちよくお手伝いができるのではないかと思います。そのためには、障がいを持つ方々の意識改革も必要だと思ひます。

障がいとは、例え同じ障がい者だとしても、本人の生活する環境や、状況によって様々であり、それは健常者となんら変わり無い。結局身近に障がいを持つ人がいなければわからないし、逆に身近に障がいを持つ人がいれば、何とかなるのである。また、これは私事であるが、幼い頃より吃音という症状を抱えている。現在のところ、理解は進んできているものの、障がい認定もされず、私は軽いほうではあるが、重度の人は相当日常生活に支障をきたしている。

行政がいくら取組んでも、周りの住民や市民の理解がなければむだ。自分の生活が第一と思う人もいると思うので、障がい者へのボランティアや、活動には手が回らないのでは？

友人の子どもが知的障がい者であったため、身近な問題として考えることができていますが、一番よかったと思うことは、自分の子どもが障がい者と一緒に育ったためか、障がい者に対する偏見がないことがよかったと思ひます。障がい者を見ていると、義務教育期間中が何とか周囲も一応対応しますが、高校、成人と進むに連れ、社会全体も含め、自立するのが難しくなると思ひますし、受入れ体制も難しく感じられます。

障害の方に何かをしてあげたいという気持ちはあるのですが、行動に移すきっかけがなく、今まで何もしたことがありません。それに仕事をしながらとなると、なかなか難しいものです。なので、項目28のようなボランティア休暇などがあれば一歩が踏み出せそうな気がします。子どもの時からの障がいのある方とふれあう機会を増やすのも、とても大切なことだと思ひます。身近にいないと、理解もしにくいし、どうしても人事になってしまいます。身近にいと様々なとらえかたになると思ひますが、何かのきっかけにはなると思ひます。子どものころ、スポーツ少年団に入っていたのですが、障がいのある方と一緒にやる機会は少なかったので、今思えば、そういう機会があつてもよかったのかもと思ひます。正直、ボランティア活動をするために、何から始めればいいのかわかりません。ボランティアをしてみたいと思ひていても、行動できない人も多いかもしれせん。どんなことをしているのかなどの情報があつたらなあと思ひます。

私の姉は重度のダウン症です。現在は73歳になる母と2人で暮らしていますが、母も病気を患っており、家庭、あるいは地域社会でこのまま生活するというのはなかなか大変です。姉自身も言語不明瞭なところがあり、自分の思い、考えを周囲に伝えるのはなかなか思い通りにいかず、ストレスを抱くようです。そんな姉も同じ障がい者と生活を共にするグループホームへ行くと、お互いに対等な立場で接することが可能で、いきいきと生活することができるようです。そんな姉の姿を見ていると、グループホームのような施設をぜひ増やしてほしいと思います。これこそ行政でしかできないサービスだと考えます。

健常者の常識（意識）と障がい者、障がい者の家族の常識（意識）の差が大きいと思う。何か手伝うとしても、何か違和感を感じてしまうこと（話をしている）が多い。

障がい者のための施設などの建設など聞こえてきますが、あまり障がい者のためという言葉は使わなくてもよいと思う。障がい者が集まっていると近寄れなくなる。私たちの中に1人とかいたら手を差しのべやすい。仙台市は福祉に力をいれていると見えてくるが、健康な人たちは必死になって働いています。バランスよい行政であってほしい。

車イス専用のリフトカーのドライバーにボランティアで従事していますが、公共交通機関の利用が厳しい障がい者の方の行動がいかにも大変かということをつくづく体験しています。行動範囲もほとんど限られて、しかも、高通費が治療費の何倍にもなるという実情に心が痛みます。地域社会でのサポート、ボランティアによる支援も大切ではあるが、基本的な行政（国家）による根本的な支援のシステムの充実が第一です。財政問題はむしろ、後退していますが、国のあり方、国民福祉ということを1度考え直してほしいです。

障がいを持っている方はどうしてもこもりがちになると思われるので、日常的に出かける環境を整えることが大切と思う。健常者も普通に接することができるように学習し、ごく普通に、両者が日常的に共生しているような社会ができるようにしていくことが必要と思う。そのために、各々ができることからやってみる。それを行政、NPOなどがバックアップするようになればいいと思う。